

令和 5 年産大崎地域の 大豆作技術情報(第 4 号)

令和 5 年 8 月 21 日発行
宮城県大崎農業改良普及センター
TEL : 0229-91-0726 FAX : 0229-23-0910
<https://www.pref.miyagi.jp/site/osnokai/>

～栽培のポイント～

- ・天候に留意し、湿害・干害対策を行いましょう。
- ・病虫害防除を適期に行いましょう。

1 気象経過

- ・期間を通して、平年より高温多照の傾向で推移しました。特に 7 月第 6 半旬は、平均気温が 28.4℃(平年差+4.1℃)、日照時間が 72.3 時間(平年差+44.4 時間)となり、いずれも平年を大きく上回りました。
- ・7 月以降の降水量は、7 月第 4 半旬、8 月第 3 半旬にまとまった降雨があったものの、少雨の傾向となりました。

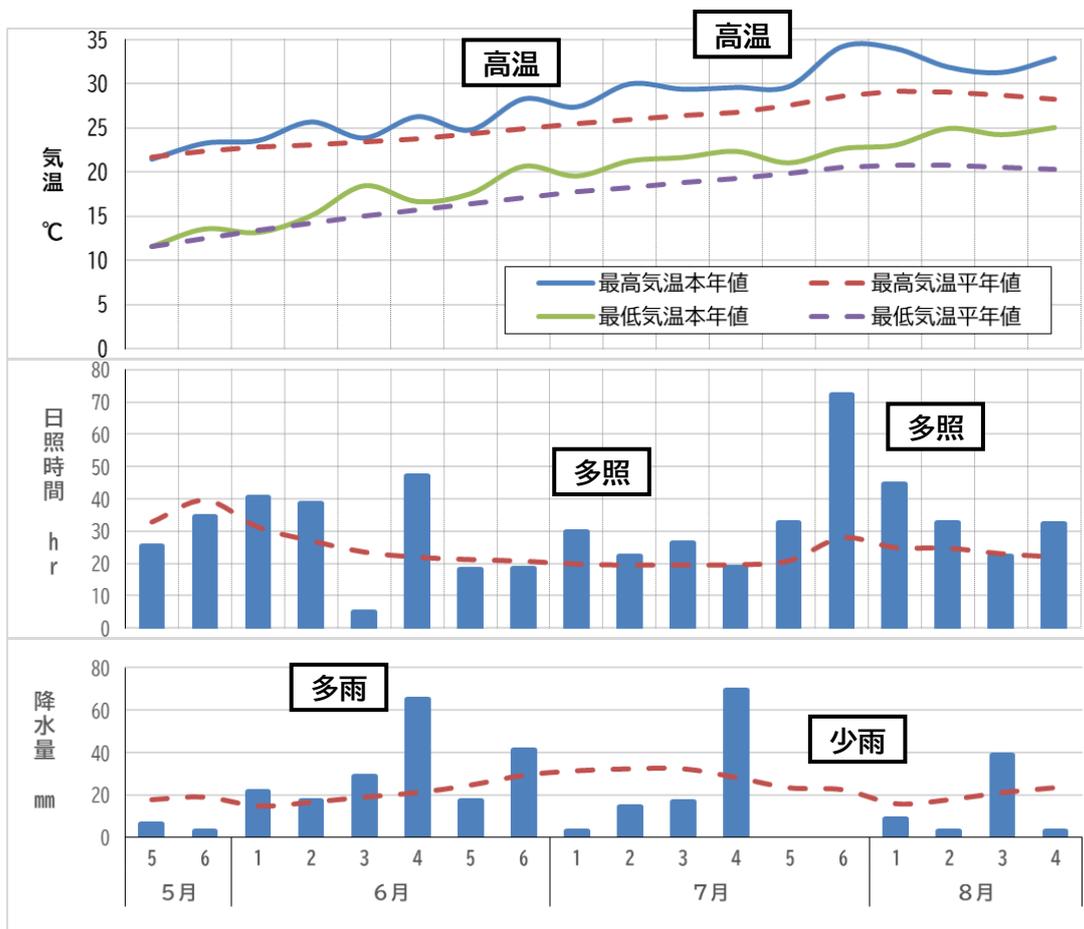


図1 5月第5半旬～8月第4半旬までの気象
※1 実線又は棒グラフが本年値、点線は平年値

2 生育概況(8月10日現在)

- ・生育量はほ場による差が大きく、「タンレイ」は平年並み～平年を上回る生育量となりましたが、他は平年並み～平年を下回る生育量となりました。
- ・生育量が平年並み～平年を下回ったほ場では、雑草の発生が目立ちました。
- ・「すずみのり」は、十分な生育量を確保できている一方で、小野田地区では害虫の発生、中新田地区では蔓化が見られました。
- ・開花期は、全てのほ場で7月下旬となっており、前5か年で最も早くなりました。

表1 生育調査結果

地区名 品種名	区分	播種日	開花期	8月10日		
				主茎長 (cm)	主茎節数 (節/本)	分枝数 (本/本)
古川 タンレイ	本年	5月27日	7月20日	70.7	15.1	3.4
	平年比	1日早い	8日早い	117%	105%	98%
古川 ミヤギシロメ	本年	6月2日	7月31日	75.1	15.8	2.8
	平年比	1日早い	5日早い	92%	99%	68%
三本木 きぬさやか	本年	6月7日	7月30日	44.1	12.3	2.8
	平年比	2日早い	4日早い	86%	101%	95%
小野田 タチナガハ	本年	6月8日	7月26日	46.0	12.3	2.5
	平年比	2日早い	7日早い	83%	91%	95%
小野田 すずみのり	本年	6月8日	7月25日	47.3	11.5	3.6
中新田 すずみのり	本年	5月30日	7月22日	84.5	14.8	4.5

※1 平年比は、前5か年(平成30年～令和4年)の平均値との比較

※2 「小野田すずみのり」、「中新田すずみのり」は令和5年より調査開始



写真1 古川「タンレイ」



写真2 小野田「すずみのり」

3 今後の栽培管理のポイント

(1) 湿害・干害対策

▶湿害対策 —降雨が続く場合—

子実が肥大する生育後期の土壌過湿は、根の呼吸阻害だけではなく、根粒菌の活性低下による窒素供給の抑制を引き起こし、減収につながります。

○降雨の前後に排水溝や明きよを点検し、排水が滞らないようにしましょう。

○水が溜まったところは溝を切り、明きよに繋げ、排水を促しましょう。

▶干害対策 —晴天が10日以上続くような場合—

開花期以降は、大豆の養水分吸収が多くなる時期であり、土壌水分が不足すると落莢・不稔莢の増加、百粒重の低下を引き起こし、減収につながります。

○かん水が可能な場合は、排水溝や畦間内に土壌表面にしみ出す程度まで通水し、ほ場に水分を補給しましょう。

○暗きよの水甲を閉じ、水分保持に努めましょう。

(2) 病害虫防除

▶紫斑病 —開花期後20~40日に1~2回防除—

○「タンレイ」は紫斑病抵抗性が「やや弱」であり、連作ほ場や成熟期に降雨が多い場合は多発するので、2回防除を徹底しましょう。

○同一系統の薬剤を多数回散布すると耐性菌が発生する恐れがあるので、2回防除の場合は異なる系統の薬剤を使用しましょう。

○収穫が遅くなると発生を助長するので、適期収穫に努め、できるだけ早く乾燥させましょう。



写真3 紫斑粒

▶マメシンクイガ —8月下旬に1回目、その7~10日後に2回目の防除—

○羽化した成虫やふ化直後の幼虫に対する防除が効果的です。

○大豆を連作すると、越冬幼虫が増加し、食害の発生が多くなるので、連作ほ場の発生状況に注意しましょう。



写真4 マメシンクイガ幼虫

▶フタスジヒメハムシ —8月下旬~9月上旬に防除—

○8月下旬頃までの若莢を食害することで、そこからカビが入り込み、汚粒（黒斑粒）や腐敗粒となります。作付け初年目から被害が出やすい傾向にあります。



写真5 フタスジヒメハムシ成虫

▶ジャガイモヒゲナガアブラムシ —8月～9月に防除—

- 8月下旬～9月上旬に急激に発生すると、吸汁害に伴う早期落葉により、収量・品質に大きな被害が出ます。
- 種子塗布処理をしていない場合は、生育後半の発生密度が高くなることもあるので、注意してください。



写真6 ジャガイモヒゲナガアブラムシ成虫

▶カメムシ類 —他の主要害虫との同時防除—

- 若莢が着き始める頃から莢が黄熟する頃までの莢内の子実を吸汁加害します。
- 防除は着莢期から子実肥大中期を重点に、他の主要害虫と同時に2回以上実施するようにしましょう。



写真7 ホソヘリカメムシ成虫

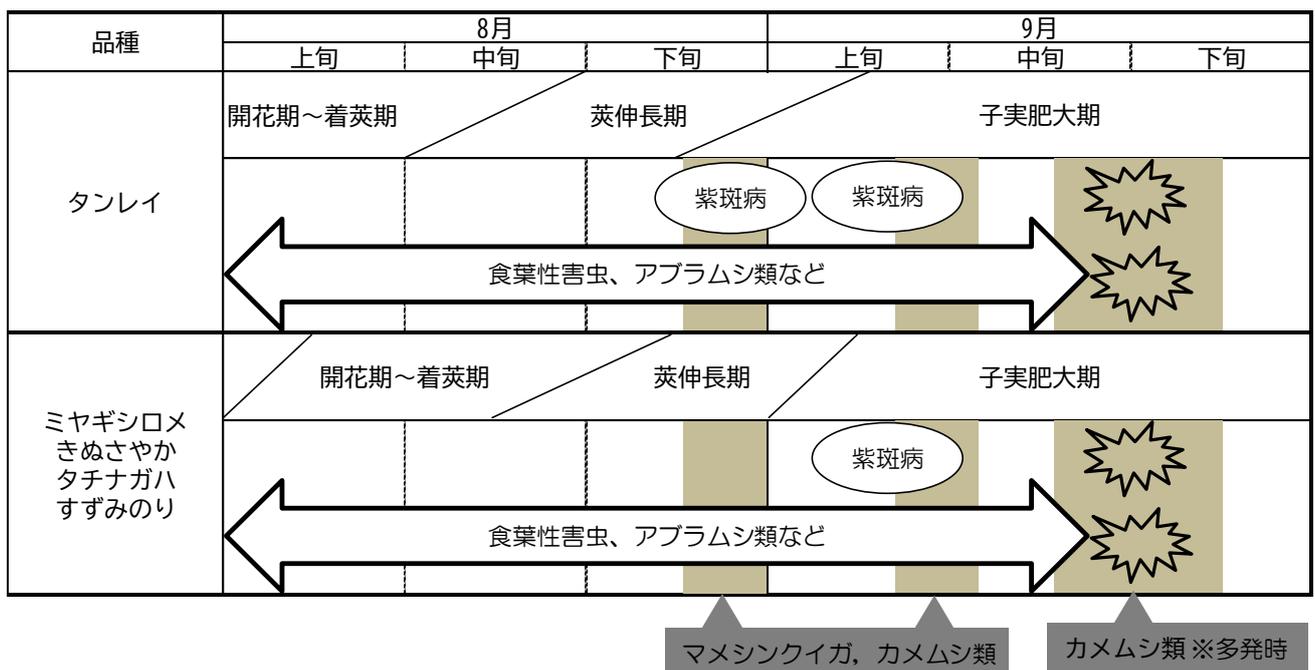


図2 病虫害防除体系例

東北地方 1 か月予報

(8月19日から9月18日までの天候見通し)

令和5年8月17日

仙台管区气象台 発表※抜粋

<特に注意を要する事項>

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

		低い(少ない)	平年並	高い(多い)
【気温】	東北地方	10	10	80
【降水量】	東北太平洋側	30	40	30
【日照時間】	東北太平洋側	30	40	30

<気温経過の各階級の確率(%)>

		低い	平年並	高い
1週目	東北地方	10	10	80
2週目	東北地方	10	10	80
3~4週目	東北地方	20	30	50

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆農薬危害防止運動(6月1日~8月31日)◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

6月から8月にかけて、農作物等の病害虫が発生しやすく、農薬を使用する機会が最も多くなる時期です。農薬安全対策の不備や不注意等による事故が発生しやすくなるため、農薬使用による危害防止と環境に配慮した適正な農薬の使用を徹底しましょう。

運動のテーマ 「守ろう 農薬ラベル、確かめよう 周囲の状況」

「大崎地域の稲作技術情報」、「大崎地域の大豆作技術情報」、「大崎地域の麦作技術情報」は、当普及センターのホームページでもご覧いただけます。インターネットで「大崎農業改良普及センター」と検索または右のQRコードを読み取ってください。

